

2017 年度 国内計画研修報告

増 田 裕 宣

1. はじめに

2017 年度、筆者は学校法人中央大学の「高等学校教員の研修に関する規定」に基づき、2017 年度国内計画研修員として研修に専念する機会をいただいた。本稿は、2017 年 4 月から 2018 年 3 月に至る 12 カ月間の研修報告書である。

2. 研修の目的・課題

今回の研修目的・課題を以下の 4 点とした。

- ① ICT を利用した体育実技の現状調査
- ② 「活動提示場面」、「問題解決場面」、「評価場面」の観点から、体育実技における ICT の利活用についての考察
- ③ 生涯スポーツの実現に向け、運動の機能的特性を重視した、「主体的・対話的で深い学び」の充実に向けた授業作りの模索
- ④ 生涯スポーツの実現を目標として、系統性を持たせた本校保健体育科中学・高等学校カリキュラムの検討

本校の一部の施設、教科で ICT 機器が導入された。近い将来には、本校新 2 号館建設に伴いネットワーク環境も整えられる予定である。新学習指導要領においては、言語能力とともに情報活用能力が、学習の基盤となる資質・能力として位置づけられた。また、情報活用能力を育むには ICT 環境の整備が不可欠であり、必要な環境を整えることも明記された。

このような背景や、スポーツ界においても、データ分析、データ活用が急速に浸透していることから、体育でも ICT 機器の活用によって、より深い学びにつなげられるのではないかという強い関心から研修申請の段階では課題を①②とした。

研修を始めてすぐの授業研究会や大学の講義などから、現在体育に求められている生涯スポーツの実現に向けては、運動の構造的特性を重視した教師主導型の授業ではなく、運動の機能的特性に着目した「主体的・対話的で深い学び」の必要性を痛感した。しかしながら現在行われている ICT 活用の多くは構造的特性に向けられた機器として捉えてしまっていることに気づかされた。そこで、「主体的・対話的で深い学び」をより促す ICT 利活用を実現するために③の目的を設定した。そして、生徒たちが生涯スポーツを実践する力をつけた

めには、③に挙げた授業や単元という「点」ではなく、中高一貫教育の6年間という「線」での、発展的に系統立てたカリキュラムの作成が必要と考え④を挙げた。

3. 研修機関

研修先として、東京学芸大学の芸術スポーツ科学系健康・スポーツ科学講座体育科教育学分野の鈴木直樹准教授研究室に所属させていただいた。

鈴木先生は「体育授業における ICT 活用に関する研究プロジェクト」の代表を務め、まだまだ研究の進んでいないこの分野で、小・中・高の現場で企業とも連携し、実践的な研究をされている。そして、講義では体育科教育法を担当されており、今回の研修目的に非常に適した環境である。また、海外の大学教授との人脈を多く持たれていることから、そういった方々からも直接指導を受けることが可能であり、グローバルな視点で体育を捉えることが出来る。

4. 研修内容

4.1. 学芸大学受講科目

【春学期受講科目】（4月～7月）

「初等体育科教育法」担当：鈴木直樹准教授

体育の授業づくりに必要な基本的な考え方の理解、体育の内容構成と展開構成を理解し実践に应用できる力の養成、学習指導案の作成が目標とされている。

社会状況の変化によって求められた「これまで」の体育観から、現在の生涯スポーツ実現を目指す体育の変遷をたどり、「これから」の体育に必要な、授業構造、運動の特性論、学習形態論、学習評価論などについて学んだ。

私はこれまで初等教育について学ぶ機会がなかったため、この講義で、本校中学生たちが受けてきた体育教育の表面的な部分しか認識していないことに気づかされた。そして、初等教育について学ぶことが、本校中学体育を見つめ直すための手掛かりになると感じ、研修中に小学校の研究授業等にも参加することとした。

また、生涯スポーツ実現に向けては、運動特性の機能的特性に焦点をあてる必要性を実感し、研究授業や授業見学での観察ポイントが明確となった。

「スポーツバイオメカニクス概論」担当：新海宏成准教授

スポーツバイオメカニクスの分析に必要な力学の基礎を習得し、スポーツ動作と力学の関係性についての理解、運動をバイオメカニクスの的に評価することのパフォーマンス向上およびスポーツ指導に対する有用性の理解が目標とされている。

講義では解剖学、筋・神経のメカニクス、キネマティクス、キネティクスの基礎、そして走・跳・投・泳動作等のバイオメカニクスを学んだ。運動者の運動経験、技術レベルが上がる程、運動動作について、なぜそうなるのか、なぜそうしなければいけないのか、を指導者は説明しなければ運動者の理解や技術習得は進まないため、このような知識は必要不可欠になってくる。

また、これらの基礎となっているのは、物理、数学であるため、他教科との連携によって、よりスポーツの学びを深められると考えるので、今後、本校の教養総合などでの可能性を探っていきたい。

「体育科教育学特論」担当：鈴木直樹准教授

海外の学校体育動向を探り、日本の学校体育のあり方について検討し、社会の変化に対応した日本の学校体育の方向性について、整理し、考えを持つことが目標とされている。

授業はアメリカ、フィンランド、イギリス、オーストラリア、中国、韓国、ラオスなどを取り上げ、受講者による各国の「学校体育の現状と課題」についての発表と、その議論によって構成された。鈴木先生が訪問されたこれらの国の体育授業の実際の映像等を見ることも出来た。アメリカやオーストラリアの子どもたちが自由に身体を動かしている姿と、中国、韓国の教員主導で動いている（指示を待っている）子どもたちの姿が対照的で印象に残った。

来校されていたアメリカの大学教授が講義に参加してくださり、学校体育の状況（日本のような全国共通の学習指導要領は無く、各州で取り組みが異なる）などを聞くことも出来た。

小学校＜競争しない（様々な動き）＞→中学校＜チームスポーツ中心＞→高校＜個人スポーツ中心＞のカリキュラムにより生涯スポーツに繋げる方法や、科学的に実証された身体活動が脳に与える影響に着目し、運動と他教科を組み合わせたり、毎朝、体育から授業を始めたりする試みが行われている話は大変興味深かった。

この講義で、過去の社会的状況からの影響（教員主導、スキル重視など）を色濃く残している現状を、改善、進化させなければならないと改めて思った。

「体づくり運動 B」担当：関野智史先生

「体づくり運動」の特性を理解し、「体ほぐし運動」や「体力を高める運動」の各ねらいに応じた運動方法、学習指導方法などについての学習（実技）とともに、学校体育や運動指導、生涯スポーツにおける「体づくり運動」の在り方についての考察を行った。

実技では音楽や用具を上手く活用する等、運動の楽しさや心地よさが体験できる創意工夫がいたるところでされていた。また、中学保健体育教員として現場で授業をされている先生ならではの様々な生徒の反応や状況での対応方法なども解説していただき、即実践可能な授

業内容であった。講義終了後にはいつも質問にも答えていただくことが出来た。関野先生の勤務校での授業見学をお願いし、後日訪問させていただいた。

「中等保健体育教育法Ⅲ」担当：鈴木直樹准教授

指導方略を学び、実践力を身につけることが目標とされ、TGfU (Teaching Games for Understandings)、協同学習、TPSR (Teaching Personal and Social Responsibility Through Activity) などについて学んだ。そして、これらの指導法を用いた学習指導案の作成を行った。指導案作成は、今までの経験則からなかなか抜け出せない自分と向き合えることになり、良い経験となった。

TGfU については昨今、日本でも広く用いられるようになっている。今までの練習→ゲームという流れから、ゲーム→練習→ゲームという形式になり、プレーヤー中心の能動的な学びを行うことが可能となる。本校においても、「主体的・対話的で深い学び」を実現し、生涯スポーツを実践する力をつけるためには、このような指導法を積極的に取り入れなければならないと考える。

「保健体育科演習」担当：鈴木直樹准教授

鈴木先生の学部ゼミ生を対象に行われた授業で、指導方略を学び、実践力を身につけることが目標とされた。授業は「『主体的学び』につなげる評価と学習方法－カナダで実践される ICE モデル（原著者/Sue Fostaty Young・Robert J.Wilson 監訳/土持ゲーリー法一 訳/小野恵子）」を用いて、單元ごとに読み解いたものを受講者が発表、議題を提示し、議論するという構成で行われた。この本の ICE モデルもこれまでの行動主義的な教育から、構成主義的な教育への転換を図るための指導方略であった。

内容に関することではないが、今までこのような授業形態を受講者としてあまり経験したことがなかったため、戸惑うところもあったが、議論が進むにつれて、自分自身の考えが整理されていくこと、他者の意見により新たな発見があることに気づくことが出来た。

中学・高校の保健では、実生活に身近な内容を取り扱うため、意見も出しやすく、生徒の各家庭環境の違いによって様々な意見を挙げてもらえるので、このような形態の授業をもっと積極的に取り入れるべきだと思った。

【秋学期受講科目】(10月～2月)

「スポーツ技術論」担当：新海宏成准教授

スポーツ選手の技術は合理的・効率的な身体活動で構成されており、そのメカニズムを理解することはパフォーマンス向上のために重要であるため、各種のスポーツ技術を分析（観

察・評価)する方法を学び、その分析結果を活かした効果的なトレーニングや指導を実践するための素養を身につけることが目標とされていた。

授業では主として「個人」で発揮する技術に焦点をあて、まず、その技術を分析するための方法(主にバイオメカニクスの観点・手法)について講義を受けた。そして、実際に分析を行うために受講者自身がスポーツ技術(陸上競技のスタートダッシュ、幅跳びの踏切動作、サッカーのキック動作、ソフトボールのスロー動作、弓道の矢を射る動作など)を撮影し、様々な角度から技術の観察と評価(初心者と上級者の比較)を試みた。

ICTの導入が進めば、このような内容での授業を体育で行うことも可能であり、初心者が上級者から学ぶことはもちろんだが、上級者自身も客観的に自分の技能を解説することで深い学びに繋がられるだろう。

様々な分析機器を駆使し、今まで見えなかったものが「見える化」されているスポーツ界において、それを活かすためにも正しく分析する力の重要性を学ぶことが出来た。

新海先生には春・秋学期ともお世話になり、講義終了後に多くの質問にも度々答えていただき、とても有意義な時間を持たせていただいた。

「ウェルネス概論」担当：阿部隆行先生

運動・食事・休養・ストレスなどが人間の生活とどのように関わっているのか、また、豊かなスポーツライフを送るために、健康科学やスポーツ医科学に関する知識を日常生活の中でいかに活用していくのかについて学んだ。

特徴的だったのは、毎回の講義開始後、自身の1週間の食事、運動、休養(特に睡眠)について、自己分析、自己採点を行う時間が設けられていたことだ。学生はスマートフォンを所持しているので、自身のスケジュール(クラブ活動、バイトなど睡眠時間等と関連しやすい予定)や、食事内容を簡単に確認(撮影しておいたもの)出来るため、1週間の思い出すことは難しい作業ではないようだった。この振り返りによって、講義内容が一般的な話としてではなく、自身の問題としてとらえることが出来るように感じた。スマートフォンを使って実生活を記録させた内容を活用することは、個人情報等配慮しなければならない課題もあるが、中学・高校保健においても有効であると考えている。

阿部先生は都立高校教員経験をお持ちのため、現場での話も多く盛り込まれていて、講義内容の多くは、中学・高校の保健において活用できるものであり、大変参考になった。

「運動学習と指導の心理学」担当：奥村基生准教授

感覚・知覚、注意、作動記憶、長期記憶、情報処理スタイル、運動制御などの理論を学び、それらを応用した運動学習のための効果的な指導法を理解することが目標とされた。

それぞれの理論は大変難しい内容であったが、奥村先生が、ボールやダーツなどの道具を用いたりしながら各理論を体感する方法を実施されたことで、理解を深めることが出来た。また、「実行してはいけないこと」ではなく「実行すべきこと」に注意を向けるところが必要であること、運動記憶は相対的タイミングとパワーを記憶しており、この相対的なタイミングとパワーは変化しにくいこと、初心者には有能感などを感じさせたい場合には恒常練習が使いやすいが変動練習の学習効果の高さを伝えることが重要であることなど、何気なくやっていた指導も、こういった事実をうまく活用すればより効果的な指導が可能であることを確認した。

講義以外の時間でも、奥村先生が顧問をされている剣道部で活用されている、先生が考案された遅延フィードバックシステムを見学させていただくなど、多くのアドバイスをいただいた。

「体育科研究Ⅱ」担当：川城健先生

この講義では体育実技の「楽しさ」や「技能」の高め方について学ぶことが目標とされた。

それぞれのスポーツの機能的特性を重視した講義展開（実技）が行われた。ルールを子どもたちの技量に合わせ簡単なものにする（上達に合わせて変化させる）ことや、ルールそのものを子どもたちが考えていく、いくつかのパターンのルールから子どもたちが自分たちに合ったルールを選んでいくなど、主体的な活動のためにルールを工夫することの大切さを学ぶことが出来た。また、教具は子どもにあわせることが必要との川城先生の考えから、講義で使用された教具（走り高跳びの用具、踏切版、ティーボールのボールスタンド、簡易コートのためのネットスタンド等）は全て川城先生の手作りのもので、運動嫌いを増やさないという先生の信念がひしひしとこちらに伝わり、受講者は毎時間敬服させられた。

小学校、中学校と現場経験豊富な先生ならではの、体育と学級経営との結びつけ方などの話も大変参考になった。

「初等体育科教育法」担当：佐藤善人准教授

1月～2月は鈴木先生の都合により、佐藤先生の研究室に在籍し、この講義を受講させていただいた。

身体教育、運動による教育、運動の教育と変換してきた体育授業を行う背景を概観し、現在の体育授業で求められている目標・内容・方法をとらえ、運動・スポーツ実践によって生涯を通じて健康・安全で活力ある生活を送るための基礎を養う体育授業づくりについて学んだ。様々な授業形態の実際の映像から、問題点などの解説がなされ、大変参考になった。

また、毎時間講義終了後には、私のために時間を割いていただき、本校での中学授業でも

取り入れていきたいと考えている運動遊びについてもご指導いただけた（佐藤先生はアクティブチャイルドプログラムの制作（スポーツ庁委託）メンバーである）。

「体育科教育実践演習 B」担当：松田恵示教授

体育科教育研究の範囲と成果を理解するとともに、特に、教育内容論に焦点をあてて研究の性質について理解を試みることを目標とされていた。

授業ではバスケット、バレー、陸上（リレー）、ダンス、テニスなどの実技を通して、「運動の特性」という概念を実践的に理解し、その特徴を考察した。

松田先生の運動を「動き」としてではなく「世界」としてとらえるという考えは、今まで私が学んだことのない形であり、運動の楽しさを伝える上で新たな視点を与えて頂けた。

また、「ビデオゲームはスポーツか？」というテーマの講義では、これからのeスポーツの動向に目を向けるきっかけとなった。

4.2. 研究授業・授業見学等の概要

4月15日 芝浦小学校（3年生マット運動）

- ・遊びの中で学ぶことが重視されており、情報を与えすぎない工夫がされていた。
- ・特別支援の生徒への対応が適切に行われていた。
- ・授業後の研究会では、先生ではなく児童に注目した発言が多いことが、児童主体の授業づくりを目指していることを感じさせられた。

4月21日 藤澤東小学校（5年生バスケットボール）

- ・授業前の児童の意識調査に挙げられていた内容に適した内容であった。
- ・ゲーム→振り返り→ゲームの流れで、ゲームから学ぶという形態がとられていた。

4月25日 三宿中学校（2年生体づくり運動）

- ・体づくり運動を「体の柔らかさ」「力強さ」「巧みな動き」に分類し、行い方、運動のコツも詳細にまとめられた運動例のプリントから、生徒が自分の体力課題に応じた運動を選び実践していた。
- ・学校内の廊下にスポーツライミングの設備が設けられたり、運動部やスポーツクラブに所属していない生徒を対象としたニューススポーツクラブ（週1回）が夏休みに行われたりするなど、日常的に運動やスポーツに親しむ習慣をつけるための活動が行われていた。

4月27日 浅川小学校（6年生ゴール型・ICT使用）

- ・問題解決場面として、ホワイトボードアプリの使用や、ゲームを撮影した動画を見て、チームでの話し合いが行われ、その模様を録画したものが教師用タブレットに送られて

いた。これにより教師はその模様の確認（誰がどのような発言をしているか等）、またその課題への取り組みが実際に行われているかの観察を行うことが出来る。

- ・児童達は戸惑うことなく、タブレットを活用していた。

9月13日 学芸大学附属竹早中学校（1年生リレー・ハードル）

- ・ハードルは誰でも越えられる高さで行われていた。
- ・リレーはペアで二人の50mの平均タイムを目標に設定し、50mで行われていた。

10月6日 筑波大学附属中学校

（2年生体育理論・3年生男子ハンドボール・3年生女子バスケットボール）

- ・体力テストの結果をパソコンでまとめ、自己分析する授業が行われていた。また、それを基に各自が次回計測時の目標設定をしていた。
- ・実技は1クラスを男女に分けて少人数で行われていたため、余裕を持った展開がされていた。
- ・ハンドボール、バスケットボールともに単元1回目の授業であったが、スキル種目が数種目設けられており、それらの計測が行われ、各自のこれからの目標がたてられた。

10月14日～18日 台湾（台湾師範大学・永和國中学・海山高級中学・南港高級中学）

- ・受講科目「体育科教育学特論」における学習の実施調査という位置づけで、台湾の学校を訪れた。
- ・台湾の体育では高校まで男女共習で行うことが通常であり、日本では別習であることが多いことを話すと不思議がられた。体育で社会性・コミュニケーション能力を高めることが目標とされていることと関連があると感じた。
- ・どの学校でも日本と同じように体力テストが行われていた。
- ・教師指導型の授業が基本的に行われていた。大規模校が多く（永和國中学は1学年34クラス）、授業スペースや1クラス当たりの人数も多いことも影響していると考えられる。
- ・保健は体育教員ではなく、専門の教員によって行われている。
- ・部活動の顧問は外部コーチが通常であり、日本の現在のクラブ活動の様々な状況を伝えると信じられないという様子だった。

10月31日 東京工業大学附属高校（3年生選択授業バスケットボール・バドミントン・卓球・キャッチボール・サッカー・カバディー）

- ・生徒たちが実施したい種目を決定し、その種目を行うにあたっての課題を設定し、授業を通してその課題解決のための活動を行い（トレーニング方法や分析方法も生徒が考える）、2学期最後にその成果を発表するという展開がされていた。
- ・種目が人数に関係なく実施されるところが、他校の選択授業とは大きく異なる。

- ・準備運動は心拍数を目安に、各種目の生徒たちで内容を考え行われていた。

3年生でこのような授業行えるように、1、2年生で心拍数に着目した運動や体育理論、安全面への配慮等の指導が徹底されている。そのため、教員は長年に渡り担当学年が固定とされていた。

11月2日 藤澤清流高校（3年生女子サッカー・ICT使用）

- ・本時の活動内容が生徒にタブレットによって提示された。映像と同時にルール説明もされるので、短時間で済み、理解しやすい内容あった。
- ・ゲームを撮影し、各チームの振り返りに活用されていた。

11月11日 筑波大学附属中学校（1年生柔道・3年生柔道）

- ・柔道の授業は「型」を教えることが主となり、教員主導の形態になりがちであるが、今回の授業は生徒たちの発見から「型」を学ぶという方法がとられていた。
- ・仲間との対話により楽しみながら学ぶ様子が見られた。

11月15日 城山高校（3年生バレーボール・ICT使用）

- ・チーム練習の活動提示で、タブレットが使用された。
- ・チームの作戦、問題解決のために、タブレットを使用し、ゲーム撮影、映像による分析が行われていた。

11月16日 筑波大学附属高校（3年生バドミントン・2年生女子ダンス）

- ・3年生の授業は選択制で行われており、種目については生徒達から授業案を募集し、その中から教員が選考した4つの種目が実施されている。
- ・バドミントンでは当番制で、授業開始から生徒が前に立ち、今日の授業内容が説明され、練習、ゲームが行われた。教師は必要に応じて、指導や注意を行っていた。
- ・2年生女子ダンスはグループごとに創作ダンス発表のための練習を行っていた。また、プレ発表会があり、グループで評価を仕合うなど、生徒同士での対話場面が多く見られた。

11月17日 学芸大学附属竹早中学校（3年生男子サッカー・2年生男子器械運動）

- ・定型の準備運動は行われない。サッカーではチームごとに行われ、器械運動では首のストレッチのみは全体で行われた。
- ・サッカーはチームごとの話し合いでポジショニングは決められており、それぞれの役割がゲーム前に確認されていた。
- ・マット運動では、自分の力に応じた種目を選び練習が行われていた。また、仲間同士で教え合う姿が多く見みられた。

11月18日 筑波大学附属駒場中学・高等学校

（中学2年生保健・高校1年生サッカー（GPS利用））

- ・中学2年生はメンタルヘルスリテラシー教育として、生活習慣の乱れから心の不調が起

こるメカニズムが説明された後、生活習慣の乱れから成績が落ち込み部活動も辞めてしまい学校に来られなくなってしまうというストーリーのアニメーションを視聴し、その生徒にどのようなことがしてあげられるかが話し合われた。

- ・高校1年生のサッカーでは、戦術を練ってプレーすることを目的とし、そのための情報の1つとして、GPSを用いて生徒個人のゲーム中の総移動距離、縦・横総移動距離等を計測した結果が提示された。今回の授業でも計測予定であったが、雨天のため、体育館でのミニゲームと並行し、データ利用法についての講義が行われた。

11月21日 東京工業大学附属高等学校（3年生選択授業・研究発表）

- ・各種目のグループにより、課題を克服するために行った練習や動作分析による成果がパワーポイントを用いて発表され、質疑応答が行われた。

12月18日 浅川小学校（4年生体づくり運動）

- ・体づくり運動を用いて、トレーニングメニューを組み合わせる→協働する→振り返り改善する→挑戦することで、プログラミング的思考を養うことを目的とした授業が行われた。
- ・トレーニング内容がカードにされていて、そのカードを目的に応じて自らが選び、組み合わせる形式がとられていた。

1月16日 秦野高校（1年生長距離走・ICT使用）

- ・前時間で行われた4000mのタイムをタブレットのエクセルファイルに入力すると、1周（500m）のラップタイム、平均時速が出され、それを基に本時（30分間走）の目標設定を入力すると、目標通過タイム（500mごと）が算出されるようになっていた。また、タブレットには、正しいフォームを解説した映像も入っており、グループごとに視聴していた。
- ・その時間のランニングの様子が録画され、30分間走終了後、各グループでフォームの確認がされていた。

2月23日 横浜国立大学附属横浜中学校（中学1年生バスケットボール）

- ・準備運動は定型の体操ではなく、運動遊びを数種類入れて行われていた。
- ・班ごとに、シュート、パス、ゲーム中の動きについての課題設定がされており、3on3によるゲームでは各班のやるべきことが明確になっていた。
- ・男女共習で、身体接触がおこるゲームであったが、特別ルール等なく男女混合チームで行われていた。

2月7日 学芸大学竹早中学校（1年男子ダンス・2年男子ダンス・ICT使用）

- ・1グループ6名程度で、テーマを決めて、自分達で選んだ曲に合わせて、それを表現するという授業が行われていた。

- ・タブレットが各グループに一台渡されて、生徒たちはYouTubeなどから映像を映し出し、それをダンスに取り入れていた。また自分たちのダンスの映像を録画して練習に活用していた。

4.3. 学会・シンポジウム等

4月23日 次世代型の球技・ボール運動の授業づくり

(主催：東京学芸大学鈴木直樹研究室)

TGFUを基盤とした実践的研究で数多くの成果をあげられているDr.Mary Henninger (Illinois State University)、Dr.Karen Richardson (Bridgewater State University)、Dr.Heidi Bohler (Westfield State University)の3名を講師として招き、教員、教員を目指す学生を対象として行われた。「戦術的状況判断能力の評価を活かす」、「ゲームの修正とゲームづくりのデザイン」、「GPAIを活用した評価のためのICT活用」のテーマで、各講師から実践を通しての理論を学んだ。ゲーム中心の授業展開を行う上で大変参考となる内容だった。

4月29日 情報教育対応教員研修全国セミナー タブレット端末活用セミナー 2017

(主催：一般社団法人日本教育情報化振興会)

新学習指導要領を見据えた「授業づくり」「ICT環境づくり」というテーマでセミナーが行われた。文科省の方からの新学習指導要領についての改訂ポイントや教育情報化の重要性などの解説があり、これから教育現場で求められる方向性を確認することが出来た。

また、ICTを使用した授業(中学校理科・国語、小学校図工)の実践例が発表された。

そこでは特定の、または限られた児童・生徒の意見だけでなく、ICTを活用することで、より多くの生徒の意見や考えを取り上げることが可能となり、児童・生徒同士の対話も増える効果があることが紹介された。

7月1日 日本体育科教育学会 第22回大会

この学会でも、シンポジウムは新学習指導要領に関することが中心であった。その中で話題に挙がった授業展開については、今持っている力で楽しさを味わう授業内容と、スキルを獲得するための授業内容とのバランスの難しさを感じた。

8月16～18日 INTERNATIONAL EDUCATIONAL TECHNOLOGY CONFERENCE

鈴木先生が「PHYSICAL EDUCATION WITH THE ICT FOR CONSTRUCTIVIST LEARNING」を発表されるため、共同研究者の1人として参加した。会場は世界でも

トップレベルであるハーバード大学で行われた。この会は、学校や大学などで学ぶために、テクノロジーと学習理論を結集して（バーチャル環境、CSCL（Computer Supported Collaborative Learning）、m-ラーニング、e-ラーニング、e-トレーニングなど）、専門家が話し合うことを目的として開催されている。

発表内容は、「主体的・対話的で深い学び」を充実させるための ICT 利活用が体育においては構造的特性に着目してしまっている問題点について述べるものであった。発表後にはイタリアの教師の方から美術での ICT 活用についての話を聞かせていただいた。

学会以外にも鈴木先生に同行させていただき、多くのアメリカの大学関係者の方々をご紹介いただいた。そして、春にお世話になった Dr.Richardson、Dr.Bohler とも再会することができ、夜にはホームパーティーに招待され、アメリカ文化に触れることも出来た。

9月9・10日 日本体育学会 第68大会

多くのシンポジウムが開かれていたが、保健の授業に関するものが興味深かった。週に1回の授業で教科書の内容全てを終わらせるために、知識伝達が中心となりがちな保健を、主体的で対話的な深い学びとするための授業紹介は大変参考になった。ICTによって身近な内容やデータを与えることによって、説明時間を短縮し、授業後半に生徒同士での意見交換の時間を取ることが可能になっていた。また、オープンエンドな話し合いの内容にすることで、生徒たちの意見が活発に出される工夫がされていた。

11月24・25日 第43回全日本教育工学研究協議会全国大会（主催：日本教育工学協会）

大会テーマが、ICT 活用で創造する「主体的・対話的で深い学び」とされていたように、ICT に関する情報、ICT を活用している学校の実践例、研究成果などが多く紹介された。

ICT を全教科で導入している先生の、使用段階が進んでくると生徒の方から「どうしてこの場面で ICT を使わないのですか？」、「ここで ICT を使う必要があったのですか？」という発言が出てきたという話がとても印象に残った。この学校の生徒にとってはもう ICT を使用することは特別なことではなく、筆記用具の一つのようなものになってきている、と感じさせられた。

1月6日 第16臨床教科教育学セミナー（主催：臨床教科教育学会）

＜新しい未来を創る「学び合い」＞というテーマで行われた。内容としては、アクティブラーニング、ICT に関するセミナーや講演等があり、ICT については企業によるセミナーも開かれた。教育現場への ICT 導入が進んでいるだけでなく、ICT 支援員の導入も進み活用されている状況をみると、本校においても、今後どのように ICT を取り入れていくの

かをスピード感をもって検討していく必要性を感じた。

Global Lesson Study（学芸大学鈴木直樹研究室プロジェクト）

この取り組みは、今後、よりグローバルな世界を迎えていく中で国内に完結せずに、国際的な問題として教育をとらえ、世界を一つのコミュニティとして実践を考えていくことを目的として行われた。

まず、プロジェクトメンバーである小学校教諭が作成した授業案について、メンバーと海外メンバーである Dr.Henninger、Dr.Richardson、Dr.Bohler とスカイプを利用し、検討会議をする。そして、修正された授業案で行われた授業を撮影し、それをメンバー全員が共有（海外メンバーに向けては英語字幕付き）し、スカイプでの会議でその振り返りを行い、またその内容を授業に反映していった。このような活動を同様の方法で2回行った（次回はアメリカでの授業が対象となる予定）。

授業案の検討では、TGfU を専門とする海外メンバーからの焦点を絞り、なるべくシンプルなゲームにした方が良いという意見と、日本側メンバーのそれだと簡単すぎないかという意見が対立した個所もあった。しかし、実際の授業ではシンプルな形式で行い、結果として児童たちの動きを活発化させたように感じた。授業ではよくある事だが、そのスポーツの正式なルールや形態にこだわり過ぎると、焦点を当てていたはずの学ばせたい動きや技術を結果的にぼかしてしまうことに改めて気づかされた。

5. 研修を終えて

本校に保健体育科教諭として赴任してから、教職課程で学んだこと、中大附属高校保健体育科の教育方針から学んだこと、そして自身の経験則等を土台として、男子校からの共学化、附属中学創設に対応しながら保健体育科教育に取り組んできた。しかし、生徒達を取り巻く社会環境や、「知識の習得」から「知識の活用」へと学校教育が大きく変化していく中、果たしてこれまでの取り組み方で、その変化に対応出来るのか、対応するだけではなくその先を見据えた教育活動が出来るのかという問いが自分に生まれていた。

そのような時期に研修期間を与えていただいたこの12カ月は、研修開始早々から大きな衝撃と多くの発見があり、自身の想像をこえる貴重な時間であった。

今回の研修課題に挙げた教育における ICT の活用については、学校単位での導入だけではなく、地域としての取り組みや研究・助成事業なども行われており、学習指導要領でうたわれたことから、さらに広がっていくことと推測される。遠くない将来、小・中学校時に当然のように ICT を活用して学習活動などを行っている児童、生徒たちが少なからず入学してくるのである。ここ僅か20年ほどでポケベルから手のひらにパソコンが取まるまでに

なり、次は AI の時代を迎え、IT もさらに指数関数的に進歩すると予想されている。様々な課題や問題が山積している本校の現状ではあるが、ICT 導入・活用に関しても積極的に検討すべき時期にきていると感じている。

今回、研修目的の「ICT の利活用」について学ぶことは、現在の体育教育の問題点（運動の構造的機能が重視されている）に気づき、授業そのものを見つめ直すことにつながった。ICT が持つ機能が、運動の機能的特性に着目した「主体的・対話的で深い学び」を実践することに有効であるからだ。今までの教授スタイルを変えることは、講義で授業案を作成したときにも感じたことだが、そう容易くはない。机上での知識や計算だけでは成立しない。しかし、それを進化させていくことこそが、研修の成果の証となるのは言うまでもない。そのためには学ぶ姿勢を続けること、自己評価すること、授業改善のために同僚そして対象者である生徒との対話を積極的に持つことを怠ってはいけない。また、主体的な学びを促進するために、自身が Teacher ではなく Facilitator としての側面を持つことを忘れてはいけないと考える。

研修の後半には、様々な学校の授業やカリキュラム、研修での学びを参考にしながら、本校保健体育科カリキュラムの再編を本校保健体育科教諭と検討することが出来た。本校佐藤天馬教諭と連携し、保健体育科教諭にアンケートを取るところから始めた。多くの意見が出され、それを基に話し合いをすすめた。各教諭とそれぞれの想いを交わすことで、大変有意義な会議となった。そして、これからの方向性として「生涯スポーツの実現」・「生徒主体の授業」を柱とすることとした。その方向性への一歩として、今年度より中学では実技を男女共習にしたり、保健・体育理論・実技の関連性をより強めるために保健・体育理論の時間数を増やしたり、伝統的に行ってきた一斉型のラジオ体操からその種目に合った準備体操を自分で出来ることを目標にしたりすることを試み始めた。今後も、本校保健体育科教諭と模索しながら、6 年間の教育活動が、系統性のある発展的なカリキュラムとなるよう構築していきたいと考えている。

研修が終了した今、多くの「学び」とともに、これからの教員生活の大きな糧になると感じているのが、研修中に得た新たな「出会い」である。何のつながりも持たない突然訪れた私を暖かく受け入れてくださり、私の思いつきに近いような意見にいつも親身に答えていただいた（今回の学びの多くがそこでの先生との会話によって深まっていったように思う）鈴木先生、研修中に様々な相談にのっていただいた次世代教育研究推進機構（学芸大学）の阿部先生、神奈川での ICT 教育の取り組みを度々ご紹介いただいた県立体育センターの肥後先生、別視点からの体育科教育の指導をいただいた筑波大学准教授宮崎先生、同じ研究室に所属し現場感覚でアドバイスいただいた大熊先生（学大竹早中）、内田先生（埼玉大附属中）、英語の不自由な私でしたが丁寧にご指導をいただいた Dr.Henninger、Dr.Richardson、

Dr.Bohler、IECT で渡米の際には何から何まで面倒をみてくださった Dr.Wing-Kai To (Bridgewater State University)、台湾での学校訪問時にお世話になった陳信亨助理教授（國立臺中教育大學體育學系）。多くの方との出会いが、私に多面的視点を与えてくれたことは言うまでもない。こういった方々への感謝の念を忘れず、これからの教育活動をより豊かなものにしていこうと思う。

6. 謝辞

最後になりましたが、今回の研修を快くお引き受けくださり、学問的なご指導に止まらず、様々なご助言をいただきました東京学芸大学の鈴木直樹先生、鈴木研究室の方々に、多大なる感謝を申し上げます。

また、本校の前校長である法学部教授小杉末吉先生、椎名甲子夫副校長、大島誠二教頭、高瀬徹教頭、大谷文男事務長、研修委員及び保健体育科の先生方をはじめとした全教職員の方々には、あたたかく研修に送り出していただきましたことを、心より感謝申し上げます。